

国家と掠奪（2）

——新大陸におけるスペインとイングランドの抗争——

吉村 知幸

はじめに

コロン（Cristóbal Colón 1451-1506年）の航海以来アメリカ大陸は、ヨーロッパ人の認識するところとなり、彼らの進出が始まった。その進出には掠奪行為も伴っていた。さらにヨーロッパ人同士の紛争、ヨーロッパ人と新大陸の住人との摩擦、これら数々の争いが新大陸において繰り返された。「新大陸」における掠奪行為は、ヨーロッパにおける掠奪行為と少し性質が異なる。新大陸において、最初に進出したものと、あとから進出したものとは、差が生じるからである。

前稿⁽¹⁾ではヨーロッパを主たる活動の舞台とした、フランスの航海者であるデュゲ＝トルーアン（Duguay-Trouin 1673-1736年）を取り上げ、スペイン継承戦争においてどのような役割を果たしたのかを考察し、フランス宮廷内での評価を検討した。彼のおこなった掠奪行為は、フランス王家に対し一定の役割を果たしたという結論を得た。そこで本稿では新大陸における掠奪行為を検討する。中でもスペインとイングランドの抗争において活躍したホーキンス（John Hawkins 1532頃-1595年）、ドレイク（Francis Drake 1540頃-1596年）を取り上げる。彼らの活動を通して、新大陸で行われた掠奪行為の意味を探り、ヨーロッパにおける掠奪行為⁽²⁾との違いを考察しよう。

1 新大陸発見から征服まで

ヨーロッパ人が新大陸と接触を持つようになったのは、コロンの航海からである。1492年から1493年にかけて、コロンの第一回航海⁽³⁾がおこなわれた。1492年8月3日パロスを出発したコロンは、およそ二ヵ月後の1492年10月12日に

エスピノーラ島に到達し、ヨーロッパ人がいまだ知らなかった世界へ到達した⁽⁴⁾。彼の航海が新大陸到達と表現される所以である。彼は航海で発見した島を、サン・サルバドル、サンタ・マリア・デ・コンセプション（現在のラム・ケイ島）、フェルナンディナ（現在のロング島）、イサベラ、フワナ、というようにそれぞれ名前をつけ、神の名のもとスペイン領として領有宣言をした⁽⁵⁾。つまりコロンの航海の目的が単なる航路の開拓ではなく、航海途上で発見した地の植民地化でもあった。1493年から1494年にかけて行われた、エスピノーラ島での植民地建設を目的とした第二回航海以降、新大陸における植民地建設はさらに進行する。1504年までに四回の航海が行われたのだが、彼自身に行政官としての才能はなく、1498年から1500年にかけて行われた第三回の航海においては、植民活動の失敗の罪を問われて、鉄鎖につながれてスペインへ戻された。

コロンの航海と同時期の1497年から1504年にかけて、ヴェスプッチ（Amerigo Vespecci 1454-1512年）が参加した、計四回の航海が行われた。彼自身は、航海の責任者ではなかったのだが、彼の残した報告書によって、コロンの到達した地域が、ヨーロッパ人の認識していなかった世界、いわゆる新世界、であったことが証明された。さらにバルボア（Vasco Núñez de Balboa 1475頃-1519年）は、1511年から1513年の探検によってパナマ地峡を発見した。その探検によって、南北アメリカが地続きであることが判明した。

これら大航海時代における探検航海のある到達点として位置付けられるのが、マガリャンイス（Fernão de Magalhães 1480頃-1521年）の世界周航である。彼は西回りで最短にアジアへと至る方法があると考え、1519年にセビリアを出発した。彼自身は、航海の途上の1521年フィリピン付近で現地の住人同士の争いに巻き込まれ死亡した。しかし生き残った航海参加者によって、航海は続けられ、1522年セビリアに帰還し、地球は丸いことが証明された。

新大陸の探検と並行し、スペインによる植民地建設が始まる。貴金属の獲得、農業プランテーションの経営等を目的として、スペインの植民事業は行われた。1519年から1521年にかけて、コルテス（Hernán Cortés 1485-1547年）らによってメキシコが征服され、1546年から1548年にかけて、ピサロ（Francisco Pizarro 1478頃-1541年）らによってペルーが征服された⁽⁶⁾。コルテスやピサロのような征服者の活動によって、新大陸におけるスペイン植民地が拡大した。

十六世紀の半ばを過ぎると、新大陸の状況は変化する。イングランド、フランスの航海者による、スペインに対する掠奪行為が盛んとなるからである。ホーキンス、ドレイクらをはじめとするイングランドの航海者の活動が始まるのだが、彼らの掠奪行為への対策に、スペインは悩まされた。

2 新大陸におけるホーキンスとドレイクの活動

十六世紀の新大陸における抗争は、スペインの植民地を軸にして展開された。広大なスペイン植民地が形成され、スペインの勢力圏となった新大陸において、スペインを対象とする掠奪行為が多くなった。この時期、スペインに対して掠奪行為を最も多く行ったのは、イングランドである。中でもホーキンス、ドレイクらは新大陸を活動地域とし、スペインに対する掠奪行為を行った。

(1) ホーキンス⁽⁷⁾

ホーキンスは、十六世紀のイングランドを代表する航海者であり、イングランドの海軍力を担う人物でもあった。彼は私掠行為の従事者でもあったのだが、奴隷交易という商人としての一面もあった。彼は1560年代に計三回奴隷交易を行った。

まずホーキンスは1562年から1563年にかけて第一回航海を行ない、その航海において西アフリカ沿岸から奴隷を獲得し、新大陸で売買した。例えば1562年10月にホーキンスの船隊は、ギニア沿岸を襲撃し、商品としての奴隷を獲得した。航海記録の筆者は、そのときの模様を、

「少なくとも三百人の黒人が彼の所有となった、そして他の商品も手に入った」⁽⁸⁾

と証言しているように、ホーキンスは多数の奴隷を獲得した。その際、相手が無抵抗ではなかったので武力を用いた。彼にとり、アフリカに住む黒人たちは商品の一つであり、売買の対象でしかなかった。彼はこのとき獲得した奴隷を西インド諸島で売買することによって莫大な利益を得た。

次に、ホーキンスは1564年から1565年にかけて、再び奴隷貿易の航海を行った。前回の航海においてもそうであったのだが、アフリカで商品を獲得し、

新大陸で売りさばき、利益を得るという方法が、彼の航海の特徴である。労働力の担い手となる奴隷は、新大陸の植民者にとり、求める商品であった。彼は、1564年12月10日から21日にかけて、ギニア沿岸の集落を襲撃し、多数の現地の住人を捕らえた⁽⁹⁾。しかしこの奴隷獲得がいつもうまくいくとは限らない。例えば、航海中に彼はポルトガル人から、「多数の黒人奴隷、さらに黄金の獲得が容易である場所がある」、という情報を得て、黒人集落を襲撃した⁽¹⁰⁾。1564年12月27日に、彼の船隊はギニア沿岸にある黒人集落を襲撃し、住人との間で激しい戦闘となった⁽¹¹⁾。彼の船隊も準備を整えて、襲撃したのだが、数で勝る集落の住人の反撃にあい、失敗した。この襲撃は失敗したものの、すでに多数の黒人奴隷を獲得していたので、1565年1月29日、ホーキンスは西インド諸島に向かった。3月16日から3月28日にかけて、サント・ドミンゴ、ケニムナオにおいて奴隷取引を行ない莫大な利益をあげた⁽¹²⁾。

1567年から1569年にかけてホーキンスは、彼にとって第三回目となる航海を行なった。この航海において彼は、スペイン植民地総督府と抗争を起し、スペイン艦隊の襲撃を受け、手痛い打撃を受けた。基本的にスペインは、植民地において外国船が貿易をすることを禁じていた。これまで彼の取引が成功したのは、スペイン側の取締りがあまり本格化していなかったからである。しかし第三回目の航海においては、彼のようなイングランドの航海者に対する取締りが本格的となった。彼の場合、スペインに対する反逆の罪も問われ、スペイン海軍による討伐の対象であった。

第三回目の航海の奴隷取引は、最初うまくいった。1568年1月15日にホーキンスは、ギニア沿岸にある集落を襲撃した。この襲撃には、ホーキンスにとっての協力者となった現地の部族が参加していた。彼が奴隷を獲得する際に、

「我らの同盟側に敵対するニグロがたてこもる一つの町を襲撃した。」

「我らの味方である王の援軍を得て、海陸双方から町を攻撃、また猛烈な火攻めを加えて（町の家屋は乾いた椰子の葉でおおわれていたから）ついに町を占領、住人を追い払って、男女、子供を合わせて我らの手で二五〇人を捕獲、また友軍の王が捕虜とした数は六〇〇に及んだ。」⁽¹³⁾

と航海記録の筆者は証言するように、現地の住人の協力、さらには現地の住人同士の対立を利用した。その現地の協力者とともに、集落を襲撃し、多数の奴隷を獲得することに成功した。彼の航海において、奴隷獲得における現地住人の協力は、重要なものであり、彼自身現地の住人からの協力を重要視していた。

ギニア沿岸で奴隷獲得に成功したホーキンスは、1568年3月27日西インド諸島に到着する。以前の航海において、奴隷の売買は容易であったのだが、この航海において、その状況は変わった。三月末に西インド諸島に到着した彼の船隊は、リオ・デ・ラ・アチャで取引を行おうとしたのだが、

「ここを管理する財務官が、いっかな取引に同意しないのみか、われらが水を積み込むことさえ許そうとしない。」⁽¹⁴⁾

と航海記録の筆者が証言するように、スペインの植民地の当局者はホーキンスとの取引に全く応じなかった。取引に応じないばかりか、

「侵入できそうな場所にはすべて幾つかの堡壘を築いて町を固めており、火縄銃の射手一〇〇人を配置して、水不足からわれらがニグロを上陸させざるを得ないように仕向けようという考えがあった。」⁽¹⁵⁾

というように、ホーキンスに対して武力を使用する態度を示した。その様子を確認した彼は、その町を武力占領することに決定し、襲撃した。襲撃は成功し、その町を占領し、

「こうして、多少の曲折の後、町を占領したが、一つにはスペイン人らがニグロを欲しがったためと、一つには財務官自身の友誼心のせいとで、われらは秘密の取引を勝ち得ることになった。」⁽¹⁶⁾

と航海記録の筆者が証言するように、スペイン人の譲歩を得て、ホーキンスの取引は成功した。

1568年7月24日までにホーキンスの取引は、かなりの成功を収め、西インド諸島を離れようとした。しかし彼の船隊は、8月12日にフロリダ沖で嵐に遭遇

し、かなりの損害を出してしまった。嵐を避けるため彼の船隊は、9月16日にサン・フワン・デ・ウルアに逃げ込んだ。港に入港できた彼は、現地の総督府に食糧の提供と船舶を修繕する許可を求めた。この交渉が始まった直後の9月17日にサン・フワン・デ・ウルアに新任のメキシコ副王を乗せた艦隊が到着した。その艦隊の到着をうけ、彼はその艦隊と交渉し、艦隊の入港を受け入れるかわりに、自らの船隊の安全を保証するように求めた。彼らの交渉はまとまり、お互いに誓約書を交わした。しかし9月23日にこのスペイン艦隊が突如、ホーキンスの船隊を襲撃した。そのため彼は、この港から離脱せざるをえなくなり、離脱した。この戦闘の結果、参加船舶のうち二隻しか残らず、そのうちの一隻が行方不明になってしまった⁽¹⁷⁾。彼自身も乗船を失い、残った一隻で、かろうじてこの地を離れることに成功した。スペイン艦隊の襲撃から離脱できた彼は、食糧不足のために乗組員をイングランド帰還組と、メキシコ湾に上陸して新大陸に残留する組、との二組に分けた。イングランドへ帰還する組を率いた彼は、1569年1月20日、イングランドに帰還した。

ホーキンスの第三回航海は、このようにして失敗に終わった。十六世紀前半のイングランドとスペイン両国の関係は悪くなかったのだが、彼に対する取締りのように、1560年代には他国の船舶を締め出していた。そのためイングランド船がスペインの取締りを受けることが多くなった。彼がサン・フワン・デ・ウルアにおいて遭遇した事件は、このような状況下で発生した。この事件は、イングランドにおいて大きな反響を呼び、スペイン船に対する掠奪行為が激化する原因の一つとなった⁽¹⁸⁾。この事件以降スペインとイングランドとの対立が激化し、双方船舶を拿捕しあう。

ホーキンスの第三回航海には、ジョブ・ホートップ (Job Hortop) という人物が参加している。彼はサン・フワン・デ・ウルアでスペイン艦隊に襲撃された後、現地に残留する組に入った⁽¹⁹⁾。彼は残留組がどのような過程を経て、イングランドへ帰還したのかについて記録している。彼はイングランドへ帰還するまでに、いくどか命の危険にさらされた⁽²⁰⁾。

まずサン・フワン・デ・ウルアでスペイン艦隊に襲撃されたときである。この襲撃によってホーキンスの船隊はほとんど壊滅に近い打撃を受け、ホートップ自身も乗船を沈められたので、泳いで僚船に逃げた。

次に命の危険があったのは、移動中のホートップらが、現地の住人に待ち伏せされ衣服等を奪い取られたときである。この争いで彼の仲間も、現地の住人によって殺害された。現地の住人の襲撃から数日後スペイン兵に遭遇し、捕らえられ、メキシコへ連行された。

次に、スペイン兵に捕らえられメキシコに連行されたときに死の危機に直面した。スペインの植民地の総督府は、非カトリック教信者に対して、改宗を強制していた。そのため非カトリック教徒である彼らは、植民地の行政官である副王によって絞首刑にされそうになった。しかし彼らはカトリック信者であるふりをして危機をくぐりぬけた。さらに命の危険に脅かされ、再び副王によって火刑にされそうになった。この時はスペインの修道士がホートップらを弁護し、処刑は取りやめられた。

最後に、ホートップはスペインに連行される途中、スペインに対する海賊行為の罪を問われ、絞首刑にされそうになった。このときもスペイン内に絞首刑に反対するものがあり、絞首刑は取りやめになった。これらの危機をくぐりぬけて、1590年の12月にイングランドへ帰還した。

ホートップらは、戦闘時、現地の住人の襲撃、スペインの当局者による処刑等によって命の危険があった。この危険の遭遇には、スペインとイングランドの対立が関係した。その危険の中でも、スペインの当局者によって処刑されそうになったのは、当時のスペインとイングランドの関係を考える上で重要な意味を持つ。

まず宗教的な対立である。この時代のスペインは、カトリックの擁護者であるという立場から、非カトリック教徒に対して弾圧した。スペインは異端審問所を設け、非カトリック教徒の弾圧を行った。非カトリック教徒を捕らえて、異端審問にかけて処罰していた。例えば彼らは新大陸でスペインの植民地総督府に捕らえられ、処刑される危険に遭遇した。

次に、新大陸における権益をめぐる対立である。当時スペインは重商主義をとり、スペイン以外の国が、スペイン植民地で交易を行うことを禁じていた。そのためスペインの新大陸植民地において争いが起こった。さらにスペイン植民地からの貴金属運搬船の襲撃はスペインに対する通商妨害、スペインの財政破壊の目的もあり積極的に奨励されていた⁽²¹⁾。このように新大陸における権益

が、両国の対立の背景にあったと指摘できる。

最後に新大陸の現地の住人のスペイン支配に対する反感が存在することである。十六世紀半ばの新大陸において、スペインによる支配は確立し、スペインの収奪が展開されていた。このスペインに対する反感が背景にあり、ホートップらは襲撃された。これは、現地の住人にとりイングランド人もスペイン人も同じ白人で区別が付かないためスペイン人に間違えられて襲われた、というのが大きな理由であった。それほどスペイン人に対する反感⁽²²⁾が強かったのだともいえる。

(2) ドレイク⁽²³⁾

ドレイクは、ホーキンスと同時期に活躍したイングランドの航海者であり、新大陸を舞台にスペインに対する掠奪行為を行った。彼はホーキンスが行なった第三回航海にも参加し、サン・ファン・デ・ウルアでスペイン艦隊に奇襲攻撃を受けた。この航海以降、彼は独立した艦隊を率い、スペインに対する復讐を明言して、掠奪行為を展開する。

ドレイクは 1572 年から 1573 年に、西インド諸島において、スペインを対象とする掠奪行為を行った。この航海の目的は、

「一五六五年および六六年とつづき、ジョン・ラヴェル船長とともにリオ・デ・ラ・アチャで受けた非道のみか、さらに一五六七年と六八年とには、これまたジョン・ホーキンスとともにメキシコ湾サン・フアン・デ・ウルアの海戦において無惨な敗北を喫していた。そしてかなりの財貨を失ったばかりか、一族および同志たちの数人までもこれを失った。」⁽²⁴⁾

と航海記録の筆者は、ドレイクがスペインからこうむった損害について証言し、その損害に対して、

「彼は西インドに対する前後二回の航海が齎すであろう収獲にすべての救済を賭けた」⁽²⁵⁾

というように、ドレイク自身の手で損害を挽回することが目的であった、と証言している。航海記録の筆者は、航海の途中でもたびたび、ドレイクがスペインに対する報復を明言している、と証言している。例えば、1572年7月28日に、カティバス島に上陸した一行に対して、ドレイクは訓示を与えた。その際、スペインに対する報復を明言し、さらに襲撃の目的地ノンブレ・デ・ディオスに予想される財宝類に対する期待を高めることによって、士気の高揚を図った⁽²⁶⁾。このドレイクによるスペインに対する報復の明言は、奴隷貿易が目的であったホーキンスの航海と対照を成すことを示す。つまり彼の航海の目的は、ノンブレ・デ・ディオスの攻撃のように、軍事的なものであった。ホーキンスのように貿易と並存する掠奪行為であるのではなく、ある地点を攻撃する軍事的な目的のための掠奪行為なのである。

ドレイクの船隊は、1572年7月29日に航海の最初の目的地であった、ノンブレ・デ・ディオスを襲撃した。スペイン側の守備隊の抵抗が激しく、戦闘は激しいものであった。その戦闘中に、

「突然彼は体力、視力、発言力ともに失い、ひどい貧血で危く失神状態に陥りかけた」⁽²⁷⁾

と航海記録の筆者が証言するように、ドレイク自身も重傷を負った。そのためドレイクらはノンブレ・デ・ディオスから撤退し、この襲撃は失敗に終わった。

ノンブレ・デ・ディオスから撤退したドレイクらは、艦隊の陣容を立て直し、新大陸のスペイン植民地、さらにスペイン船に対する掠奪行為を再開した。翌年4月には、ノンブレ・デ・ディオスに向かう銀輸送団の襲撃に成功⁽²⁸⁾するなど、多くの掠奪行為を行ない、

「誰ももう心は空、みんな大喜びで迎えに出、牧師の許に残ったものなどほとんど皆無だった。いまやわれらが隊長の偉業により獲られた成果という形で示された、仁慈深きわれらが女王陛下と、およびその国家に対する神の愛と祝福の証を見んものと、我先にとみんな駆け出してしまったのだ。」⁽²⁹⁾

と航海記録の筆者が証言するように、ドレイクらは歓呼の声をもって迎えられ、1573年8月9日にプリマスに帰還した。

なおこの航海には、

「ところで、これらフリゲート船の黒人たちが、ノンブレ・デ・ディオスの現況を詳しく教えてくれた」⁽³⁰⁾

と航海記録の筆者が証言するように、シマローンと呼ばれる逃亡奴隷がドレイクの航海を助け、スペインに対する掠奪行為に参加している。そしてドレイク自身も、

「われらが隊長としては、なんとかこれらの黒人たちをうまく利用したいとの考えがあり」⁽³¹⁾

と航海記録の筆者が証言するように、自らの掠奪行為に積極的に参加させている。シマローンのような現地の協力者が生まれる背景に、ヨーロッパ人に対する、特にスペイン人に対する反感があった⁽³²⁾。

現地の住人だけではなく、フランスの海賊もドレイクの航海に関与した。例えば1573年3月21日にフランスの海賊と遭遇している。

「相手はわれらと同様、フランス軍船ニュー・ヘイブン〔ル・アヴル〕号の船長テトゥであり、しきりにわれらに救援を求めたのだった。」⁽³³⁾

ドレイクは、このフランス船に対して救援物資を送った。彼らとドレイクは同年の4月の半ばあたりまで、行動をともした⁽³⁴⁾。フランスの海賊は、ドレイクの航海において共同作戦を展開し、スペインに対する掠奪行為に参加した。これは当時の新大陸において、フランスも掠奪行為を行ったことを証明するものである。

このように1570年代にドレイクは、スペインに対する掠奪行為によって名声を獲得した。イングランド内で大きな評価を得たドレイクは、1585年から1586

年にかけて、二十五隻という大規模な艦隊を率い、西インド諸島方面へ向かう⁽³⁵⁾。その航海の目的として、これまでの航海と同様に、スペインに対する報復、さらにスペインの植民地襲撃が目的であることを明言している⁽³⁶⁾。この航海において、多数のスペイン領植民地を攻撃したように、軍事的な行動がさらに顕著であった。

1585年9月12日にプリマスを出発したドレイクの艦隊は、カナリア諸島を経由して、西インド諸島を目指した。11月17日にサンティアゴに到着し、翌日攻撃し、掠奪をした⁽³⁷⁾。この攻撃に成功したドレイクらは、12月18日にサントドミンゴ付近に現われ、休息を取り、翌年1月1日に、サントドミンゴを攻撃し、掠奪に成功した⁽³⁸⁾。さらに彼らは、2月から6月にかけてカルタヘナ、キューバ周辺の各地で掠奪行為を行なった⁽³⁹⁾。大量の掠奪品を得ることができた彼らは、1586年7月28日にプリマスに帰還した⁽⁴⁰⁾。

以上のように、十六世紀後半のスペインとイングランドは、対立状態であった。ホーキンスは商業的、ドレイクは軍事的、とその対立要因は異なっていたのだが、少なくともこの両者にとり、スペインは「敵」であった。その力関係は、彼らが行った掠奪行為、1588年のアルマダ海戦⁽⁴¹⁾におけるイングランドの軍事的勝利があったとしても、全体的にスペイン有利で推移した。1595年から1596年にかけて、ホーキンスとドレイクらは艦隊を率い、両者にとっては最後となる航海に出た⁽⁴²⁾。その航海は、スペイン艦隊の反撃にあい、失敗に終わり、両者は航海の途上で病死する⁽⁴³⁾。この航海の失敗は、スペインの軍事的優位、イングランドの海軍力が組織として確立していなかったことを証明した。この航海の失敗から数年後、1603年にエリザベス一世は死亡し、テューダー朝は断絶し、スチュアート朝の時代になる。

3 同時代人の見方

(1) アコスタ⁽⁴⁴⁾

では当時のヨーロッパ人は、ホーキンスとドレイクらの行った掠奪行為をどのようにみなしていたのだろうか。スペインの宣教師であるアコスタ(José de Acosta, 1540-1600年)は、彼の著作において、ドレイクの航海について言及している。例えばアコスタは、ドレイクらイングランドの船乗りがマゼラン海峡を通過し、

ペルーにおいて行った掠奪行為を、

「当代では、イギリスの海賊フランシス・ドレークが同じ海峡を通過し、その後南 [太平洋] 側からサルミエント船長が通過した。そして、最近では、昨一五八七年、また別のイギリス海賊が通過し、目下ペルー海岸を航行中である。」⁽⁴⁵⁾

このように証言している。これは彼らの行動が情報として、スペイン本国に伝わっていたということである。当時のスペインの新大陸植民地における、ドレイクのようなイングランドの船乗りの活動は、スペインにとっても無視しえなかった。そのため彼らの動向は、重大な関心事であった。さらに、

「一五七九年、フランシス・ドレークがマガリャンイス [マゼラン] 海峡を通過して、チレとペルー海岸を走航し、多額の銀延棒を運送中のサン・フワン・デ・アントーナ号を略奪したので、副王フランシスコ・デ・トレードは、海峡調査のため、二隻の優秀な船 [旗艦 カピターナ エストラ・セニョーラ・デ・エスペランサと、副艦 アルミランテ サン・フランシスコ] を派遣した。」⁽⁴⁶⁾

このようにドレイクの活動に対する、スペインの対策についても証言している。前項において取り上げたように、ドレイクは、スペインを対象に掠奪行為を行った。そのドレイクの活動は、スペインの当局者にとって、早急な対策を必要とするものであった。そのためドレイクに対する討伐軍を編成し、軍艦を派遣することもあった。

(2) ハクルート⁽⁴⁷⁾

以上では、まずスペイン側の記録に基づき、ホーキンス、ドレイクの評価を見たが、次にイングランド側の記録を見る。イングランドの航海記録を収集したハクルート (Richard Hakluyt 1552-1616 年) は、1584 年に『西方植民論』を書き、その中で当時のイングランドの置かれた状況、およびこれから取るべき方針について提言した。

まず宗教的原因によるスペインとの対立についてである。イングランドの宗教改革の影響であるのだが、非カトリック教徒であるイングランド人がスペイ

ン人に捕らえられると、異端審問所に送られた。そのため、セビリアなどの商館に駐在している商人は商取引を継続するために、そして異端審問所へ送られることを避けるためにカトリック信者のふりをしなければならない、という状況を指摘している。そのような状況なので、セビリアなどの商館に駐在している商人の立場は悪くなり、商業取引にも影響があるので、スペインとは関係のない別の交易ルートを探すべきだと主張していた⁽⁴⁸⁾。

次にハクルートは、新大陸におけるスペインの状況について、スペインと新大陸の現地の住人が対立状態であることをまず指摘し、フランス人のフロリダ襲撃を例にして、イングランドもフランス人と同じように現地の住人と同盟を結び、彼らとともにスペインの艦隊を襲撃すれば、スペインにとっては大きな痛手になると主張した⁽⁴⁹⁾。

さらにハクルートは、スペインの新大陸の現地の住人やヨーロッパにおいてのネーデルラントに対する残虐行為について取り上げた。新大陸の住人が全滅に近いほど減少した原因はスペインの残虐行為のためで、それらの残虐行為は諸外国の非難のみならず、同国人であるラス・カサス⁽⁵⁰⁾も非難し、そのような残虐行為のためにスペインは、ほとんどの国を敵にしたと指摘している⁽⁵¹⁾。

ハクルートの対スペイン感情がうかがえる部分は以上のとおりだが、彼はスペインの既得権益に対して、イングランドがどのように対応すべきか、ということを主張している。そのため、アジテーターめいた印象があり、事実を歪めてしまった点が全くないとはいえない。つまりラス・カサスのスペイン批判等を利用して政治宣伝をし、スペインの不当性を強調して、イングランドの正当性を主張しているということだ。スペインの行為を誇張した点を無視すべきではないが、その点を差し引けば、当時のイングランドの状況を知る上では大変参考となる。

4 スペインとイングランドとの抗争における両者の評価

以上検討したように、イングランドとスペインの対立において、ホーキンスとドレイクは、スペインに対する掠奪行為を行ったことにより、軍事的に大きな役割を果たした。イングランドにおいてハクルートのように、ドレイクらの活動を容認する意見を出すものが出て、さらに国王も彼らの航海に援助を与え

たことから、大きく評価されていたことがうかがえる。スペインにとっては、アコスタの著作に見られるように、両者の活動が無視しえないものであった。その対策のために艦隊が派遣され、イングランド船は討伐の対象であった。さらにイングランドに駐在するスペインの外交官から、イングランドの船団に關する情報が伝えられている⁽⁵²⁾。

十六世紀半ばの新大陸へ向かうイングランドの航海は、1560年代まではホーキンスのような奴隷貿易を目的とした航海が多かったのが、1570年代になるとドレイクのようなスペインに対する掠奪行為を目的とするものが増えた。この変化のきっかけの一つとなったのが、1568年サン・フワン・デ・ウルアでの事件である。この事件以降両国の摩擦が強まったとされる⁽⁵³⁾。1560年代に行われた、ホーキンスの第一回、第二回の航海において、彼の奴隷貿易は成功する。その成功の要因として、スペインの植民地政策が緩やかであったことが考えられる。植民者にとり、ホーキンスがもたらす奴隷は求める商品であった。そのためスペイン領内での商売に規制⁽⁵⁴⁾があったとしても、それが厳格に運用されることがなかった。しかし彼の第三回の航海においては、スペイン本国の方針に従い、その規則が厳格に運用されるようになる。そのためホーキンスは、交易を行うためにスペイン植民地に対して武力を用い、現地の総督府との抗争を招いた。ドレイクの航海は、スペインに対する報復と戦闘を第一の目的とし、交易をほとんど行わず、スペインに対する掠奪行為で利益をあげた。

では十六世紀のスペインは、どのような状況におかれたのだろうか。新大陸においてスペインには、現地の住人との紛争、次にドレイクらヨーロッパの船乗りたちに対する対策、という問題があった。現地の住人との紛争は、コロンの航海以来、スペインの植民地建設において起こっている。コルテス、ピサロらの征服活動に限らず、スペインは、植民地化する過程において、激しい収奪を展開した。そのためスペイン支配に対する抵抗が各地で起こった。その一つに、シマロンの活動があげられる。彼らはスペインの植民地を襲撃し、ドレイクらの航海を援助した。彼らがもたらすスペインに関する情報は、ドレイクにも役立った。さらにイングランド人にとっては、スペイン人に捕らえられ、異端審問所に送られることは、非常に恐ろしいことであった。交易上の摩擦と同じく、このスペインの対イングランド政策の厳格化に対する反発は、イング

ランドのスペインに対する掠奪行為を激しくする要因となった。

以上のことからスペインに対するホーキンスとドレイクらの掠奪行為を位置付けると、国王から船舶の提供を受けたことから分かるように、公的側面の存在が指摘できる。しかし行動の主体は個人である。この公と私の混在が彼らの活動の自由さの背景である。次に彼らの掠奪行為は、出かけた先の掠奪行為、つまり非ヨーロッパ世界である植民地において行われた掠奪行為であるという点である。地中海、ヨーロッパ上での掠奪行為は、その当事国間の利害が直接的に関係する。植民地の統治は、現地の総督府の裁量にゆだねられる部分があり、イングランドの航海者の襲撃への対応も植民地総督府にゆだねられた。そのため、新大陸での抗争は、ヨーロッパでの抗争とは異なる意味合いが存在した。国家体制が確立しつつある時期において、植民地の統治も重要な問題であった。本国とは異なり、統制がききにくい場所である。そのなかで、どのように抗争を解決するのか、植民者にとっても自らの財産を守るという点で、重要な問題であった。国家の枠組が整い、植民地が本国の統治体制に組み込まれるまで、個人の裁量にゆだねられる部分が存在する。個人の能力に頼らざるを得ないからこそ、ドレイクらのような存在が活躍できた。しかしホーキンスとドレイクの最後の航海が失敗に終わったことは、個人の能力に頼る軍事制度の限界を示し、国家によって組織化された海軍の誕生をうながした。

註

- (1) 拙稿「国家と掠奪(1)——デュゲ＝トルーアンの私掠行為とその役割——」『AZUR』3、2001年。
- (2) 本稿では取り上げないが、地中海におけるヨーロッパとイスラム国家との関係もまた、当時のヨーロッパの掠奪行為を考察するうえで重要な問題である。
- (3) 会田由他監修『航海の記録』大航海時代叢書 1、岩波書店、1965年、にガマ、コロン、ヴェスプッチ、バルボア、マガリャンイスの航海記録は収められている。
- (4) コロン自身は到達した地が「インド」であったと信じていた。
- (5) 同上書、59ページ。
- (6) コルテス、ピサロらの記録については、生田滋他編集『征服者と新世界』大航海

- 時代叢書 第 12、岩波書店、1980 年、に収められている。
- (7) ホーキンスの航海記録は、C. R. Markham, ed., *The Hawkins' Voyages during the Reigns of Henry VIII, Queen Elizabeth and James I*, New York, Burt Franklin, 1970. 生田滋他編集『イギリスの航海と植民』一 大航海時代叢書 第 17、岩波書店、1983 年、に所収のものを参照した。
- (8) *Ibid.*, p. 6.
- (9) *Ibid.*, pp. 16-21. (同上書、270-274 ページ。)
- (10) ホーキンスが行動を決定する際に、船乗りの間での情報交換が大きな影響を与えたことの一つの例でもある。
- (11) *Ibid.*, pp. 21-23. (同上書、275-276 ページ。)
- (12) *Ibid.*, pp. 25-28. (同上書、280-285 ページ。)
- (13) *Ibid.*, pp. 71-72. (同上書、328-329 ページ。)
- (14) *Ibid.*, p. 72. (同上書、331 ページ。)
- (15) *Ibid.*, p. 72. (同上書、331 ページ。)
- (16) *Ibid.*, pp. 72-73. (同上書、332 ページ。)
- (17) この船はドレイクが指揮していた。ホーキンスは、彼が自分達を見捨てたと非難した。*Ibid.*, pp.78-79. (同上書、340-341 ページ。)
- (18) 同上書。巻末の解説において指摘されている。
- (19) 同上書、341-342 ページ。
- (20) Job. Hortop, *The Trauailles of an Englishman*, DA CAPO PRESS, Amsterdam, 1972. p. 31.
- (21) 生田滋他編集『イギリスの航海と植民』一、541 ページ。
- (22) スペイン人の現地の住人に対する残虐行為はラス・カサス (Bartolomé de las Casas 1474-1566 年) が詳しい。ラス・カサス著 染田秀藤訳『インディアスの破壊についての簡潔な報告』岩波書店、1987 年。
- (23) ドレイクの航海記録は、Philip Nichols, *Sir Francis Drake Reuiued*, DA CAPO PRESS, Amsterdam, 1973. Walter Bigges, *Sir Frances Drakes' West Indian Voyage*, DA CAPO PRESS, New York, 1969. 生田滋他編集『イギリスの航海と植民』一、所収のものを参照した。
- (24) *Ibid.*, pp. 2-3. (生田滋他編集『イギリスの航海と植民』一、362 ページ。)
- (25) *Ibid.*, pp. 2-3. (同上書、362 ページ。)
- (26) *Ibid.*, p. 9. (同上書、373 ページ。)
- (27) *Ibid.*, pp. 16-17. (同上書、381-382 ページ。)
- (28) *Ibid.*, pp. 82-83. (同上書、451-452 ページ。)
- (29) *Ibid.*, p. 94. (同上書、463 ページ。)
- (30) *Ibid.*, p. 8. (同上書、371 ページ。)

- (31) *Ibid.*, p. 8. (同上書、372 ページ。)
- (32) 同上書、372 ページ。
- (33) *Ibid.*, p. 79. (同上書、447 ページ。)
- (34) *Ibid.*, pp. 80-90. (同上書、448-459 ページ。)
- (35) 下表は、本稿において取り上げた航海記録を基にして、年度ごとに集計した。最初の三回の航海は、ホーキンスの指揮であり、次の二回の航海はドレイクの指揮であり、最後は両者が指揮した。

年代	参加船舶数	うち国王所有船舶数
1562 年	3 隻	
1564 年	6 隻	2 隻
1567 年	6 隻	2 隻
1572 年	2 隻	
1585 年	25 隻	2 隻
1595 年	27 隻	6 隻

この表を見る限り、参加船舶二十五隻というのは、大規模であったことがわかる。

- (36) Walter Bigges, *op.cit.*, p. 18.
- (37) *Ibid.*, pp. 11-12.
- (38) *Ibid.*, pp. 16-19.
- (39) *Ibid.*, pp. 29-50.
- (40) *Ibid.*, p. 50.
- (41) ネーデルラントの内乱に介入したイングランドに対して、スペインがいわゆる「無敵艦隊」を派遣し、カレー沖で軍事衝突をした海戦である。ドレイクも司令官の一人としてこの海戦に参加した。
- (42) その航海の様子は、Kenneth. R. Andrews, ed, *The Last Voyage of Drake & Hawkins, Hakluyt Society, Cambridge, 1972.* にまとめられている。
- (43) ホーキンスは 1595 年、ドレイクは 1596 年に病死した。
- (44) 会田由他監修『新大陸自然文化史』上、下 大航海時代叢書 3-4、1966 年、に収められている。この本の出版は 1589 年であり、ラテン語版であった。
- (45) 会田由他監修『新大陸自然文化史』上、253 ページ。
- (46) 同上書、255 ページ。
- (47) 生田滋他編集『イギリスの航海と植民』二 大航海時代叢書 第二期 18、岩波書店、1985 年、に収められている。
- (48) 同上書、27-36 ページ。

- (49) 同上書、71-77 ページ。
- (50) ラス・カサス著 染田秀藤訳、前掲書、において新大陸の現状を論じている。
- (51) 同上書、106-120 ページ。
- (52) Kenneth. R. Andrews. ed, *op.cit.*, pp. 1-11. イングランドに駐在するスペインの外交官から、ホーキンスとドレイクの最後の航海について、スペイン本国に報告を送っている。
- (53) 生田滋他編集『イギリスの航海と植民』一、のドレイクの航海記録の解題において指摘されている。
- (54) この時期のスペインは、植民地において自国船以外の交易を禁じていた。

A Z U R

本記事は、成城大学フランス語フランス文化研究会の
機関誌『AZUR』第4号(2003年3月発行)に掲載されました。

成城大学フランス語フランス文化研究会

Société d'étude de la langue et de la culture françaises
de l'Université Seijo

http://www.seijo.ac.jp/graduate/gslit/orig/areas/europe/azur_index.html